

令和元年6月24日現在

機関番号：32707

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13272

研究課題名(和文)学習対象としての周縁的英語論の試み：タイ人訪日旅行経験に基づくタイ英語の教材化

研究課題名(英文)An attempt to redefine marginal Englishes as learning targets: creating ESP materials featuring Thai English based on Thai visitors' experiences in Japan

研究代表者

宮本 節子 (Miyamoto, Setsuko)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：80386896

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：英語話者間の平等性、コミュニケーションの効率性という観点から、本研究では英語を公用語としないタイで使用される独自の英語(タイ英語)を題材とし、近年急増するタイからの訪日観光客との「共通語としての英語(ELF)コミュニケーション」を円滑に行うための、観光業従事者或いは観光業への就職を目指す学生が学習すべきタイ英語の聴解に特化したWeb教材を作成した。分野別英語教育(ESP)のアプローチに沿った教材開発にあたり、これまで学習対象外とされてきた非英語母語話者が使用する特定の英語変種の特徴を抽出・分析し、固有のニーズと明確な目的を設定することで学習対象になり得るという視点で教材作成がなされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

World Englishes (WE)論は、国内共通語としての機能に着目し外円英語の固有の価値を説いた点で画期的であったが、その一方で拡大円英語については規範を内・外円英語へ依存しているため直接の学習対象にはなり得ないとしてきた。しかし、本研究では「相互理解の達成という目標の前にはいかなる英語変種も等価である」という国際語としての英語(EIL)、およびコミュニケーション上の実需を重視する分野別英語教育(ESP)の視点を取り入れ、「訪日観光客との英語コミュニケーション」という日本国内の英語使用の現実に基づいた理論的な枠組みを設定することで拡大円英語であるタイ英語の学習対象化を可能にした。

研究成果の概要(英文)：This study aims to create an online aural comprehension material that focuses on the characteristics of English spoken by Thai native speakers (ThaiE), designed specifically for learners within Japan's hospitality industry. The project is based on the perspective that "any English variation is equivalent before the goal of achieving mutual understanding." This project also incorporates the discipline of English for Specific Purposes (ESP) that focuses on the specific needs of the language learners. This research is distinguished in legitimizing ThaiE to be a learning target for a discourse community, which is comprised of tourism workers in Japan. Their common objective is to achieve more effective ELF communication with their Thai customers.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 分野別英語教育(ESP) リンガ・フランカとしての英語(ELF) 国際英語論 タイ英語 観光英語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 2015 年当時には 1,973 万人超の外国人が日本を訪れ、上位 6 か国・地域は中国(約 499 万人)、韓国(約 400 万人)、台湾(約 368 万人)、香港(約 152 万人)、アメリカ(約 103 万人)、タイ(80 万人超)の順であった。この数を訪日外国人の主要な母語で見ると中国語話者が 50%、韓国語話者が 25%、タイ語話者が 4%となり、非英語母語話者が 8 割以上を占める。この割合を踏まえると、共に非英語母語話者である日本人サービス提供者と訪日外国人との間の ELF コミュニケーションの実情に注目せざるを得ない。つまり、それぞれの英語非母語話者(訪日客)がそれぞれの母語や文化に影響を受けた異なる英語変種(いわゆる「なまった英語」)を使用し、その理解が現場スタッフに求められているという現状がある。特に訪日タイ人の急増は最近の現象である上にタイ語は日本では馴染みの薄い言語であるため、タイ語の影響を受けたタイ英語の観光現場での理解が問題になっている可能性は高いと考えられる。

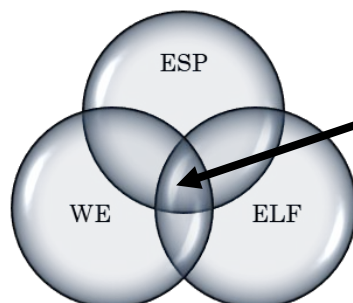
(2) この現状にも関わらず、タイも日本同様、主に米語が規範英語として学習されており、これは「非英語母語話者は英語を母語、或いは公用語として使用する地域の英語を規範とするべきである」という、近年の様々な英語変種それぞれの在り方を描写的に研究する分野の嚆矢となった World Englishes (WE) 論における考察とも一致している。しかし日本、タイを含む拡大円英語地域に依然根強く残っている「ネイティブ英語偏重主義」は日本の観光現場における ELF コミュニケーションにむしろ弊害をもたらしている可能性がある。日本人とタイ人との ELF コミュニケーションを例に取ってみると、実際にはそれぞれ母語の影響を強く受けた英語変種を使用していながら、互いの英語変種を訛った(正しくない)ものとみなし、互いから同じように離れた米語のみを学習対象として尊重するという認識のズレが生じていると推測される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで学習対象外とされてきた非英語母語話者が使用する特定の英語変種の特徴を抽出・分析し、固有のニーズと明確な目的を設定することで学習対象になり得るという視点に立ち、分野別英語教育(ESP)のアプローチに沿った教材開発を行うことである。具体的には日本英語使用者が聴解しづらいと思われるタイ英語の特徴を特定し、インバウンド観光現場での英語コミュニケーションに特化したタイ英語の英語聴解教材を作成する。つまりこの際、意思疎通を最優先する ELF の機能面を重視する。そのため学習目標とする英語に規範英語からの「逸脱」或いは「誤用」があったとしても、日本英語がそれをある程度共有する場合には学習範囲からは除外される。

3. 研究の方法

本研究のアプローチとして、相互理解の達成という目標の前にはどの英語変種も等価であり、その自立性を積極的に認めようとする「国際語としての英語」(English as an International Language: EIL)の立場を出発点にしている。本研究の斬新性は、この EIL 論を理論から実践に踏み込むための実験的試みにあり、独自の規範確立に足る使用域と機能を持たないとされる英語変種の一つであるタイ英語を学習過程に組み込み、学習対象として教材化するという前例のない視点そのものにある。とはいえ、特定の拡大円英語変種、例えばタイ英語を一般的な英語教育カリキュラム全てに含めることは適当ではなく、このように議論が拡散していくのを防ぐため、もう一つの理念の柱として、本研究は「分野別英語教育」(English for Specific Purposes, ESP)の視点を取り入れている。特定の職業上の目的や価値観を共有する人たちで形成されている言語グループ(ディスコース・コミュニティ)を設定することで、ESP としての英語変種学習が可能になると考えられる。本研究で着目する事例では、日本国内でタイ人にサービスを提供する観光業従事者には、英語を共通語として顧客の意図を正しく理解するという明確な目的が存在する。つまり、訪日旅行という限定された場における英語使用を対象とし、そこでの相互理解を促進するための学習対象としてタイ英語をとらえることが可能になると考えられる。本教材開発プロジェクトは、このように EIL の観点を切り口として WE 論、ELF 論、ESP 論の交わる部分を“EIL-based ESP”と呼称し、学習対象として明確に領域化した。



目標領域：タイ英語
国内観光現場という枠組みの中で、WE 論、ELF 論、ESP 論の交わる領域を学習対象として特定する。

ESP: English for Specific Purposes
WE: World Englishes

4. 研究成果

本研究の目的達成のため、学習ニーズ調査、試作教材の効果検証調査、本教材の作成の三段階を設定し研究を進めた。

(1) 学習ニーズ調査（宮本・渡辺 2017）

ホテルスタッフへのインタビュー調査

訪日外国人観光客はWE論における拡大円に属する英語の非母語話者が約8割を占める。彼らと日本人ホテルスタッフのコミュニケーションの実態の把握、また職務現場で耳にする多種多様な英語に対する印象、特に拡大円英語の中で中国英語・韓国英語と比較してのタイ英語の印象を把握し、タイ英語を学習対象とするニーズがあるかどうかをインタビュー調査(5名)した。その結果、訪日外国人接遇の現場において拡大円変種の学習ニーズがあることが確認でき、特に中国英語・韓国英語と比較して接触機会が少ないタイ英語については、タイ英語の特徴を集約、言語化したものに触れる機会がないために英語変種の一つとして捉える視点を持っていないことが推測され、潜在的学習ニーズが高いことが示唆された。

大学生への言語態度調査

訪日外国人上位出身国者の話す英語（アメリカ英語、中国英語、韓国英語、タイ英語）がどのように認識されているのかという観点から英語専攻の大学1年生72名を対象に言語態度の傾向を探った。46ワードの平易な英文を同一スピードで聞き、それぞれの英語について「聞いたことがある（familiarity）」、「発音が聞き取りやすい（intelligibility）」、「意味が理解しやすい（comprehensibility）」、「このように話したい（preference）」の4項目に関する評価を精査した結果、内円英語、とりわけアメリカ英語への評価が高く、中国英語、韓国英語はちょうどアメリカ英語とタイ英語の間の値を示しており、タイ英語は、「発音が聞き取りやすい」と「意味が理解しやすい」の項目において評価が顕著に低かった。これは通常の日本における英語教育のモデルがアメリカ英語であることの影響が示唆され、ホテルスタッフへのインタビューで言及されたタイ英語の困難性が裏付けされたと考えられる。

これらの学習ニーズ調査によって、概してタイ英語は現場スタッフにも大学生にも「わかりにくい」と感じられ、コミュニケーション上の課題となり得るが、対策の必要性に反して「タイ英語を学ぶ」という視点は見られないという事が確認できた。これは本研究の基本的な認識と共通しており、タイ英語を学習対象としてとらえなおす必要性が実証されたと考えられる。ただし、この独自の英語は多目的な英語習得の規範モデルにはなり得ず、現実的には、一般的な英語学習に、ESPとしてタイ英語を組み込んでいく形となることを改めて留意する必要がある。

(2) タイ英語試作教材の効果検証調査（宮本・渡辺 2018）

上記学習ニーズ調査で得た知見を踏まえ、専門家との意見交換、情報収集を行った上でタイ英語の教材作成に着手した。教材作成フェーズの第一段階として、タイ英語の聴解を困難にしていると予測される日本英語とタイ英語の語法・音声面の違いを解説し、実際のタイ英語音声を加えた試作教材を作成し、少人数(6名)の大学生を対象にパイロットレクチャーを実施した。効果の検証方法として、タイ英語の音声面での主な特徴を解説した教材を学習することで、学習前後で聴解力に変化が生ずるかを3回の聴解テストのスコアによって確認することにした。また、スコアの推移では把握しえない教材の効果をパイロットクラス後の学習者インタビューによって確認した。その結果、レクチャー前よりもレクチャー後のテストスコアが伸びたのは6名中3名にとどまり、当初の予想通り各学習者のスコアの推移に一定の方向を見出すことはできなかった。試作教材のタイ英語の聴解力を高める効果は聴解テストの数値の推移では明示されなかったものの、事後のグループインタビューによって、試作教材によって学習者が心理的にタイ英語への寛容性を高め、「きれいに話す」ことよりも「通じることが重要」という共通語としての英語の機能面を重視する観点を強めたことがうかがわれ、日本におけるELFコミュニケーションの現状に沿ったESP教材として有益に成り得ることが示唆された。また、学習者の英語力の幅を考慮に入れ、教材の形式は紙ベースよりもオンライン形式が望ましいことも確認した後に本教材の作成を行った。

(3) 本教材（Web教材）の概要

教材タイトル：Understanding the English of Thai Visitors -タイ人観光客への英語接遇
(URL: <http://sagami-englishes.com>)

音声：2名のタイ人ナレーター（男女各1名）

構成：

1) 導入レクチャー：「なぜタイ英語を学ぶのか？」

- ▶ 主な訪日観光客の母語から見る「共通語としての英語(ELF)」
- ▶ 日本とタイにおける英語学習事情
- ▶ タイ英語の文法及び発音の特徴
- ▶ タイ英語と日本英語の共通した特徴及び日本英語との主な違い

- ▶ センテンス・単語の聴解演習
- 2) 状況別リスニング練習 (20 レッスン)
 - ▶ 接客スタッフとしての状況の提示
 - ▶ タイ人のお客様の発言を聞く
 - ▶ Quiz 1: お客様の意図を確認する
 - ▶ Quiz 2: お客様に応える
 - ▶ 聞き取りのポイント
 - ▶ 関連語句・センテンスのリスニング
- 3) 復習レッスン
- 4) 補足
 - ▶各レッスンの参考・関連語彙リスト (音声付)
 - ▶教材の理論的背景 (和文・英文)
 - ▶ (教材の関連事項について今後学習者向けのコラム等を順次追加予定)

(4) まとめと本研究の意義

ネイティブ英語偏重批判に始まった WE 論の関心対象は長らくインドなどの英語第二言語国で使用される外円英語変種であり、英語規範を発展させる機能を理由に外円での英語使用の正当性を主張した。しかし、その対比として日本などの拡大円英語は規範を内・外円英語へ依存していると自律性を認めてこなかった。近年に至っても、拡大円英語圏においては自身の英語変種に対する自己評価も、他の拡大円英語変種に対する評価も総じて低い。しかし新たな傾向として、全ての英語変種はコミュニケーション上の機能という点で等価であるとする「国際語としての英語」(EIL)の視点を取り入れ、拡大円英語変種の独自性や国際的通用性が注目されつつある(McKenzie 2008; 塩澤・小宮 2017; 橋本 2017; 宮本・渡辺 2016)。この多様な英語変種の自律性を積極的に認めようとする理念は拡大円英語話者の英語使用上のエンパワーメントに重要な役割を果たしたものの、その英語の独自性ゆえに、特定の文脈を想定しない一般的な英語習得の規範モデルにはなり得ず、特定の英語変種を学習対象とする試みは行われてこなかった。

本研究は EIL の立場を出発点とし、さらに、分野別英語教育 (ESP) の視点を取り入れ、接触機会の多い観光接客という限定された場における英語使用を対象とし、そこでの相互理解を促進するための個別の学習対象として拡大円英語変種を捉えている。日本及び東/東南アジア圏では主に規範としてのアメリカ英語が学ばれている。しかし ELF コミュニケーションを促進するために学ばれているのが、相手が実際に話している英語ではなく、互いの英語変種から同じように離れたアメリカ英語であるというズレが生じており、これを英語話者間の平等性、コミュニケーションの効率性という観点から解決する必要があるというのが本研究の学術的な問いであった。このズレの認知と矯正の必要性は、本研究においてある程度の正当性が確認できたと考えている。

本教材開発の最も顕著な特徴は、非英語母語話者の英語の特徴を学習する環境を提供することであり、これは拡大円英語に学習対象としての「権威づけ」を行うことを意味する。拡大円英語へのこのような権威付けは、WE 論における既存認識を覆すものであり、これは学習者である日本英語使用者自身の英語認識への肯定的変化を促す。本教材の効果の検証が今後の課題であるが、“EIL-based ESP”の理論的枠組みを実践し提示する意義は大きいと考えられる。将来的にはタイ英語以外の主要な英語変種も、この枠組みのもと特定の学習ニーズを限定することで学習対象とみなされ、国内の観光現場の ELF コミュニケーションが改善されることが期待される。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

宮本節子・渡辺幸倫、訪日タイ人観光客への英語接客を目的とした ESP 試作教材の作成、相模女子大学文化研究、第 36 号、査読無、2018、pp.3-24.

宮本節子・渡辺幸倫、日本における『タイ英語』の認識について：ホテルスタッフへのインタビュー及び大学生の意識調査の分析、相模女子大学文化研究、査読無、第 35 号、2017、pp.25-36.

[学会発表](計 6 件)

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori, "Thai English for Learners in Japan's Hospitality Industry: Material Development of English for Specific Purposes", 24th Asia Pacific Tourism Association Conference, Shangri-La's Mactan Resort and Spa, Cebu, Philippines (2018/07/05)

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori, "Material Development of Thai English for Learners in Japan's Hospitality Industry: a Pilot Study", 23rd Conference of the International Association for World Englishes, Ateneo de Manila University, Philippines (2018/06/02)

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori, " Toward better ELF communication between Thai visitors and Japanese hospitality service providers: sharing expertise with Thai EFL professionals ", The 2017 Thammasat ELT Conference, Thammasat University, Bangkok, Thailand (2017/07/07)

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori, " Needs Analysis of Thai English as a Learning Target: Business ELF in the Tourism Industry of Japan ", The 22nd Conference of the International Association for World Englishes, Syracuse University, USA (2017/07/02)

MIYAMOTO, Setsuko, " Thai English as a learning target? Needs analysis within the context of English for the tourism industry of Japan ", 日本「アジア英語」学会第40回大会(中京大学)(2017/06/25)

MIYAMOTO, Setsuko and WATANABE, Yukinori, " Working English in the Tourism Industry in Japan: from an ELF Perspective ", 22nd Asia Pacific Tourism Association, Legendale Hotel, Beijing, China (2016/06/02)

〔その他〕

ホームページ等

" Understanding the English of Thai Visitors-タイ人観光客への英語接遇 ",
<http://sagami-englishes.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 節子 (MIYAMOTO, Setsuko)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：80386896

(2) 研究分担者

渡辺 幸倫 (WATANABE, Yukinori)

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：60449113